

# CITIZEN OF THE YEAR 2011

社会に感動を与える人々を応援します



笹原 留似子さんによせて

1人1人の生と死に、丁寧に向き合い、独自の発想と行動で地道に続けられたことに心から感動しました。荒くれた魂を鎮める。そんな心と行動を尊敬いたします。この気持ちを「笑」という書で表現させて頂きました。

武田 双雲



# 被災地で復元納棺に献身し 今も人々の心に寄り添う

笹原 留似子さん / ささはら るいこ 1972(昭和47)年生まれ。岩手県北上市在住



シチズンホールディングス株式会社  
代表取締役社長  
戸倉 敏夫

## CITIZEN OF THE YEAR

社会に感動を与えてくれた市民に光をあて  
心打つその活動や行動をたたえます

シチズン・オブ・ザ・イヤーは、1990年のシチズン創立60周年に際し、社名の「CITIZEN(市民)」にふさわしい記念事業をとの  
想いから誕生いたしました。以来、多くの市民に喜びや感動を与  
えてくれた人々を顕彰しています。

毎年、新たな感動に出会うたび、強く心を打たれます。

特に2011年は、東日本大震災による甚大な被害が及ぶなか、  
私たち一人ひとりが社会の在り方や自分の生き方というものを考え直し、人と人とのつながりの大切さを再認識した年でもありまし  
た。そうしたなかで、受賞者の方々のひたむきな活動に触れると  
き、私たちは、自らどう生きていくかを問いかけられた思いがします。  
いつの時代も、明るい未来を築いていくのは、温かい行為の積  
み重ねではないでしょうか。これからも、シチズングループは、より  
良い社会づくりに貢献する人々を応援してまいります。

### CONTENTS



3 被災地で復元納棺に献身し  
今も人々の心に寄り添う

● 笹原 留似子さん



7 生徒の喜ぶ顔を思い浮かべ  
点訳を続けて半世紀

● 竹内 龍幸さん



11 映像授業の可能性を信じ  
教育改革に挑み続ける

● 税所 篤快さん

15 対談 シチズン・オブ・ザ・イヤー  
選考委員長 2011年度受賞者  
山根 基世さん & 税所 篤快さん

18 歴代受賞者一覧

### シチズン・オブ・ザ・イヤー

市民に感動を与え、より良い社会づくりに貢献した  
人々を顕彰する制度です。毎年、1~12月までに発行  
された主要日刊紙のなかから、賞にふさわしいと思われ  
る記事を選び、主要新聞社の社会部長や有識者で  
構成する選考委員会により、3組の受賞者が決定しま  
す。これまで、日本人はもちろん、日本で市民社会に貢  
献された外国人の方も顕彰しています。

### 各受賞者へ贈る 書

書道家  
武田双雲



昭和50年熊本生まれ。3歳から母である  
書家・武田双雲(そうよう)に書を叩き込まれ  
る。東京理科大学工学部卒、NTTに約  
3年務めた後、2001年1月より書道家とし  
て湘南で創作活動をはじめ。代表作に  
「人生」「戦」「種」「波」などがある。

笹原 留似子<sup>さん</sup>

RUIKO SASAHARA

# 大切な人の 一番いい笑顔 ずっと心に残してほしい

「ああ、妻です。これで、子どもたちもお母さんにお別れができます」  
東日本大震災の発生から間もなく被災地に入った笹原留似子さんは、津波や火災で大きな損傷を受けた遺体を生前の穏やかな姿に戻す、復元納棺ボランティアに献身しました。そして震災から1年以上経った今も、笹原さんは被災された方々の心に寄り添っています。

「ご遺族が新たな一歩を踏み出すきっかけに」

岩手県北上市で復元・納棺の会社「桜」の代表を務めている笹原さんは、震災発生後間もなく、知り合いの住職・太田宣承さんやスタッフの菊池秀樹さんたちと共に、支援物資を積み込み込み沿岸部の大船渡市に向かいました。想像を絶する状況のなか、訪ねた遺体安置所で3歳くらいの女の子の遺体に出会いました。損傷が激しく、両親がこの子に再会したときの深い悲しみを思い、「自分なら生前の姿に戻せる」とついにそう思った笹原さんですが、それは法律上、許されないことでした。身元不明で遺族の許可が得られないからです。



今も毎日のように被災地を往復して支援を続けている笹原さんと菊池さん(左)

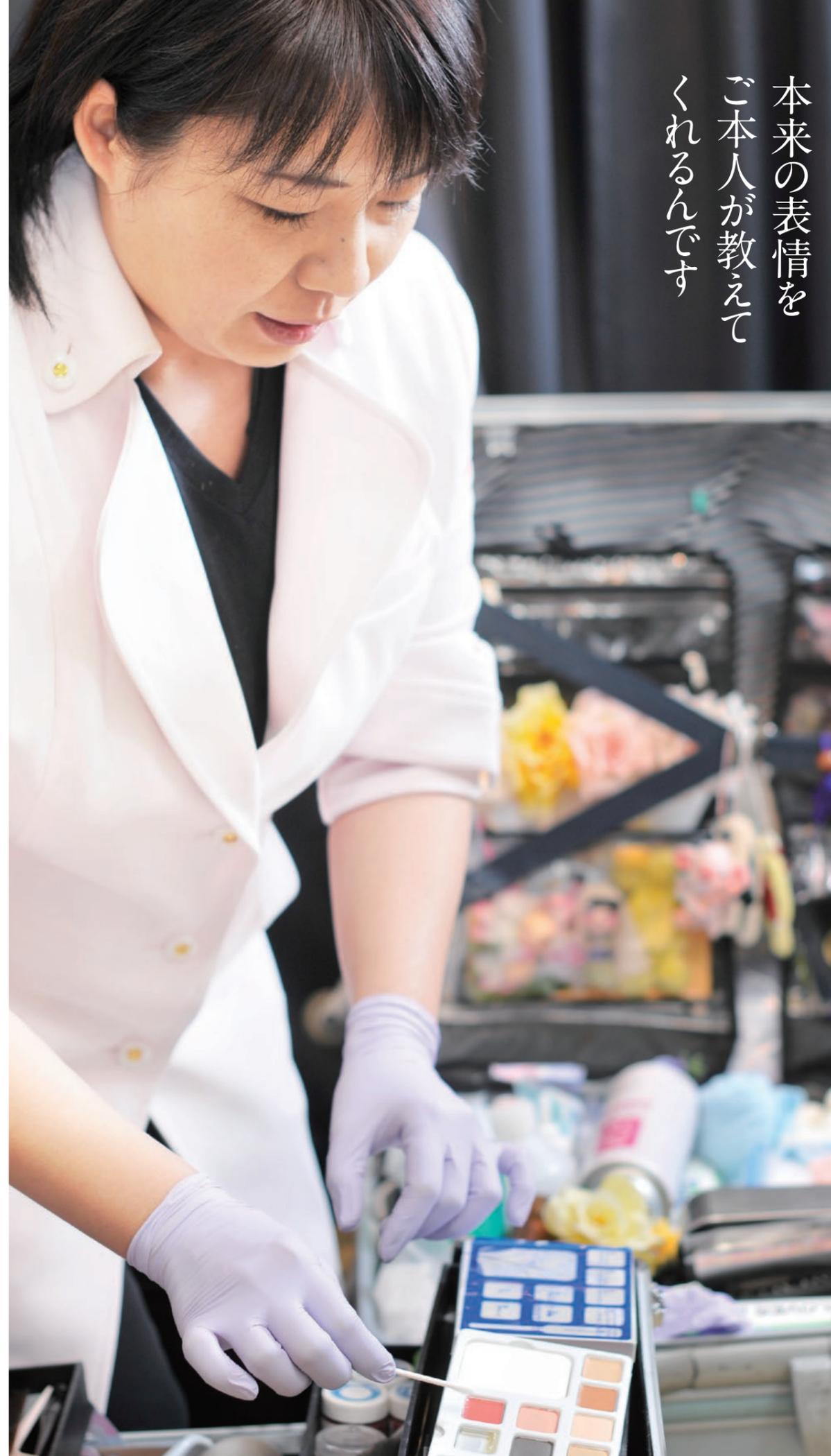


遺体安置所で連日復元納棺ボランティアが続けられました

亡くなった方が寂しくないよう、道に迷わないようにと納棺の時に一緒に納める手作りの「導き地蔵」

「すぐにでもきれいな体に戻してあげられるのに、それができない。あの悔しさは今でも忘れることができません」。そこから、笹原さんたちの復元納棺ボランティアがスタートしました。津波が去った後、家族を失った人たちの悲しみは言葉に尽くしがたいものでした。しかも、多くの遺体は損傷がひどく、遺体と対面した家族の心にさらに深い傷を残したのです。それでも生きていかなければならない家族のために何ができるか。笹原さんは、復元納棺というご遺族への支援を黙々と始めました。それは、遺体を生前の穏やかな姿に戻し、一番いい笑顔を中心のなかに残して生きていってほしいという、自分

本来の表情を  
ご本人が教えて  
くれるんです



にしかできない支援です。

大きな損傷を受け、発見までの時間の経過した遺体は、復元に4〜5時間を要することもありました。しかし、そうした献身により、多くの遺族が穏やかな気持ちで別れの時を迎えることができたのです。

笹原さんは、亡くなった方の笑顔にこだわってきました。「笑顔を自分が好きなんです。こわばった顔を自分の体温でマッサージしていくと、本人が教えてくれるみたいに出きて、にこって笑うんです」。参加型といわれる笹原さんの納棺では、ご遺族はお別れをする人の手や顔に触れ、みんなで送り出します。亡くなった本人のためにも、それが一番だと思っています。

全国からの支援と仲間たちに支えられて

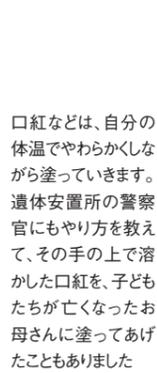
笹原さんたちは寝食を忘れ、往復4〜5時間もかかる沿岸部の陸前高田市や大船渡市など約7市町村を回り、連日復元納棺ボランティアを続けました。活動が報道などで紹介されると、全国から支援物資や復元に必要な脱脂綿、化粧品などが届くようになり、仕分けには多くの仲間



全国から届いた支援物資などに添えられた手紙は、知り合いの太田宣承さんが副住職を務める碧祥寺(岩手県和賀郡西和賀町)に納められ、閲覧できるようになっています



が協力してくれました。「遺体安置所では、何人もの方が泣きながら、自分の家族も戻してもらえますかと話しかけてくれました。もちろんいいですよと答えると、おいくらですかって聞かれるんです。これは全部支援物資として全国から届いたものなんです。皆さんのことを思っている気持ちがここに込められているから、お金はいらないんですよって答えると、また皆さんの目から涙があふれました」



口紅などは、自分の体温でやわらかくしながら塗っていきます。遺体安置所の警察官にもやり方を教えて、その手の上で溶かした口紅を、子どもたちが亡くなったお母さんに塗ってあげたことありました

# つながれるから 頑張れる

一人ひとりの  
生きてきた証を  
忘れないように

菅原さんは、復元納棺ボランティアをしている時から現在まで、自分が関わった人たちの思い出を、ご遺族の言葉や自分の思い出とともに絵にしています。それぞれ生きてきた証を忘れないよう、残しておきたいと始めました。



津波による壊滅的な被害が  
今も残る岩手県・大槌町

最初に復元できなかった3歳くらいの女の子への思いをつづった絵。菅原さんは、亡くなった人たちの生きてきた証を忘れないよう、自分の思いやご遺族との思い出を今もスケッチブックに描き続けています



絵には、復元した方たちへの思いや、ご遺族の愛情などがつづられ、見る人の心に深くしみみます。

「あるおじいちゃんは、亡くなった3歳の孫がまだオムツを付けているので、本人が困らないようにと、どこからかオムツを持ってきて小さな手に持たせてあげたんです。まだお店もやっていないような時期だったんですよ」。菅原さんはそんな思い出を絵に残し続けています。

発見される遺体の状態が復元できる限界を超えた7月まで、300体を超える復元納棺を行いました。行動を共にした菊池さんは、「復元に使う付けまつ毛などが足りなくなると、菅原は自分の髪を少しずつ切つて続けていましたね」。そう振り返ります。シチズン・オブ・ザ・イヤーの受賞を聞いた時、周りの人たちは自分たちも一緒に受賞したように喜んでくれたそうです。

## みんながつながって 一歩ずつ進む

菅原さんや菊池さんは、昨年の秋から、医師と共に沿岸部の仮設住宅などで被災された方々



の交流の場となる「お茶っこの会」を始めました。片道100kmを超える道のりを連日往復しながらの活動です。震災からある程度時間が経ち、家や家族や友人を失い心身のバランスが崩れてしまいがちな被災された方々のため、菅原さんは何か支援できないかと思っていました。知り合いで緩和ケアの専門医である北海道大学の田巻医師に話したところ、快く相談に乗っていただき、仲間の医師にも声を掛けていただきました。そうしてスタートしたのが「お茶っこの会」です。



「マスターはお医者さん」と名付けられた大槌町の「お茶っこの会」。菅原さんや医師たちは、被災地の方々に寄り添いながら、それぞれが自分たちにできる支援を続けています

竹内 龍幸さんによせて

誰かに評価されとかではなく、自分の信じた道を、地道にコツコツと進み続けるには、途中で様々な困難があったと思います。しかし、それでも続けられたその心構えに感動しました。独自の道をつくられてきたことを書て表現しました。

武田 双雲



# 生徒の喜ぶ顔を思い浮かべ 点訳を続けて半世紀

竹内 龍幸さん / たけうち たつゆき 1928(昭和3)年生まれ。静岡県浜松市在住



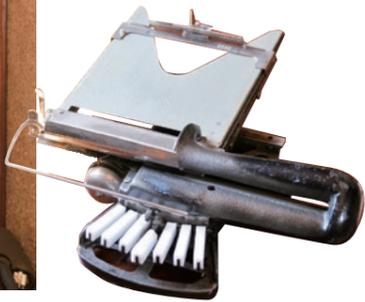
社会貢献

# 気が遠くなる ような医学辞典も 毎日一字ずつ

愛用された  
点筆と点字板



使いこまれた点字タイプライターと、書棚で点訳を待つ「日本古典文学大系」全100巻。すでに3分の1まで点訳が進んでいます



辞書や一般図書もほとんどないという現実に直面します。そのため授業もなかなか進まない状況でした。やがて竹内さんは、「なければ自分で作ろう」という決意をしました。こうして地道な点訳作業が始まったのです。

さまざまな作品に触れてほしいと幅広く点訳

1年ほどで点字の規則を習得した竹内さんは、生徒たちの協力も得ながら、昭和26年6月から学習に役立つ百科事典の「ア」から点訳を始めました。以後、放課後や帰宅後、休日などを利用して、生徒に校正、製本などを手伝ってもらいながら黙々と点訳を続けました。

後に点字タイプライターを使うことになりましたが、最初は点字板と先端に針のついた点筆を使い、厚紙に一字ずつ点字を打っていくという地道な作業が続けられたのです。

日々のコツコツとした作業も、積み重ねれば大きな力となります。点訳本が数十冊にもなる小

今も、ほぼ毎日1～2時間は点訳を行うという竹内さん。疲れたら無理をしないのが長く続くコツと話します



点訳を支え続けた奥さまと、浜松市のご自宅前で



盲学校で点訳をする竹内さん(30代のころ)



浜松市内の大学で熱心に点訳を指導(50代前半のころ)

学生向けの百科事典や、中学生・高校生向けの百科事典、国語辞典と、点訳本は増えていき、マツサイジ師の国家試験の勉強に必要な医学大辞典49巻は、長崎盲学校からの協力も得ながら、10年以上かけて作り上げ、学校に寄贈しました。さらに、生徒たちの読書欲に応えたり、読んでほしい本

自身で点訳を続ける傍ら、40代のころからは放課後や休日を利用して、ボランティアで中学、高校、大学へ点訳の出張指導を行うようになりました。こうした活動は息が長く、今も浜松市内の福祉会館で週に1回の点訳指導を行っています。また、市内を中心に点訳サークルの結成にも

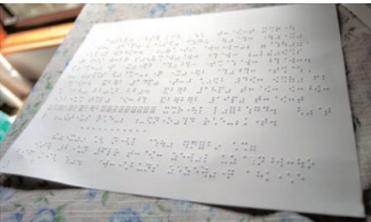
## ボランティアで 高校生や大学生に 点訳を出張指導

「先生、今度はこういう本が読みたい」と生徒が言ってくるんですよ。そうすると、やっぱり出来上がったときの喜び顔が思い浮かびまして、点訳にも力が入りました。生徒のなかには、一生懸命勉強してアメリカに留学し、向こうで先生になった女子生徒もいましたよ」。竹内さんはうれしそうに振り返ります。今でも、交流のある教え子が少なくないそうです。



CITIZEN OF THE YEAR 2011 02

竹内 龍幸さん  
TATSUYUKI TAKEUCHI



# 生徒の「読みたい」という声に いつも心を励まされ

「先生、また戻ってきて勉強を教えてください！」

昭和24年。大学卒業を前に就職先の候補を幾つか訪ねた竹内龍幸さんは、浜松の盲学校で生徒からそんな言葉をかけられました。明るい表情で慕ってくる生徒たちとの出会いが、60年に及ぶ点訳の始まりでした。

あまりの  
点訳本の少なさに  
自ら作ることを決意

静岡第二師範学校(現・静岡大学教育学部)で最終学年を迎えた竹内さんは、昭和24年、就職に際し幾つかの学校などを訪問しました。そのなかの一つが、後に教師生活のほとんどを過ごすことになる浜松盲学校(現・静岡県立浜松視覚特別支援学校)でした。

戦後間もないこともあり、校舎は病院だった建物を借用したもので、大きなガレージのような場所を幾つかに区切って教室に使っていました。生徒数は少なく、1学年が5～6人で、小学校から高等学校まで合わせても盲学校全体で60人ほど。それでも生徒たちの表情は生き生きとしていました。別れ際、竹内さんは生徒たちから、また戻ってきて勉強を教えてくださいと懇願されました。「その言葉に引かれてね」と、竹内さんは当時を思い出し笑顔を見せます。

浜松盲学校に赴任した竹内さんは、そこで生徒たちが使う点字の教科書が少なく、点訳された

# 読んでくれる人と 家族に支えられ



尽力しました。  
結婚以来、竹内さんの点訳をさまざまな形で支えてきた奥さまの倭子(しずこ)さんは、「結婚した時にはもう点訳をしておりましたけれども、本当に地道に続けてきたことは大変だったと思います。喜んでくれる人がいたことが長く続けられた理由の一つでしょうね。そういえば、孫が夏休みの自由研究に、点字のやり方を主人に教わりながらまとめたことがありました」。そう奥さまが話す隣で、竹内さんはうれしそうにうなずきます。



浜松盲学校(現・浜松視覚特別支援学校)の図書館で寄贈した点訳本に思わず笑みがこぼれます

## 生徒にも伝わる 手づくりの温かさ

現在、浜松視覚特別支援学校となつている旧浜松盲学校には、今でも竹内さんが寄贈した点訳本が数多く所蔵され、最近の点訳を集めた棚には竹内さんの寄贈本コーナーのプレートが掲げら



毎朝のラジオ体操と清掃活動を50年以上続けています



は、竹内さんから指導を受けた方が少なくないそうです。点訳を続けて60年以上、4000冊以上の点訳を手がけてきた竹内さんですが、今は全100巻にも及ぶ「日本古典文学大系」や、20巻を超える「昭和万葉集」の点訳に挑んでいます。「古



点訳本と一緒に寄贈した原本には、関連した新聞記事や資料なども挟み込んであります

かつて教鞭をとった旧浜松盲学校の図書室にて(竹内さん夫妻と、後列左から図書担当の谷山さん、藤田校長先生、畫間副校長先生)



典文学の点訳は楽しいものですよ。打ちながらこんな注釈もあるのかなんてね。専門が国語ですから」。そう目を細めます。竹内さんは、その目標のためにも、日課のラジオ体操と清掃活動を50年以上続けていて、健康維持に努めています。「シチズン・オブ・ザ・イヤー受賞の知らせを受けたときは信じられない気持ちでしたが、本当に感激しました。最初は点訳本が少ないことから始めましたが、私自身が点訳を好きになったことや、生徒たちの喜ぶ顔がうれしかったこと、そして家内の支えが、今日まで続けられた原動力だと思つています。誰もが好きでやれることではないと思つていますので、私ができるかぎり、続けていきたいと思つています」

## 税所 篤快さんによせて

実がなるまでには、かなりの苦勞、困難があつて、それを諦めずに、乗り越え、やり抜き、希望や笑顔の実をしっかりと実らせたこと。心から尊敬して、表現させて頂きました。

武田 双雲



# 映像授業の可能性を信じ 教育改革に挑み続ける

税所 篤快さん / さいしよ あつよし 1989(平成元)年生まれ。東京都足立区在住





# 夢を諦めかけた生徒たちに 進学チャンスを!

「貧しい高校生たちに、自分の可能性を信じさせたい」

圧倒的な教師不足が都会と農村で教育格差を生み、能力があっても農村の高校生は進学を諦めざるを得ない。バングラデシュでそんな現実を目の当たりにした税所篤快さんは、映像授業で農村の高校生を支援し、見事、快挙を成し遂げました。



現地で仲間を増やすコミュニケーションの達人だといわれる税所さん

## グラミン銀行と出会い 日本人初の コーディネーターに

2008年夏。世界に飛び出して何かしたいという思いを抱いていた大学生の税所篤快さんは、「グラミン銀行を知っていますか」という一冊の本と出会いました。「貧しい人々に、ただお金を与えるのではなく、ビジネスができる資金を貸して、尊厳を持って暮らしていけるようにする」という内容です。



グラミン銀行総裁のムハマド・ユヌス博士と

自分のできるビジネスをしっかりと行っている様子を見ることができました。

日本に戻った税所さんは、グラミン銀行で自分なりの新たな挑戦を始めようと決意しました。

中学、高校、大学とチャリティーや社会起業に憧れ実践しながらも、疑問や挫折感の連続だった税所さんは、ここで初めて「本物」に出会った思いがしました。グラミン銀行について詳しく聞くため、秋田大学助教授の著者にアポイントをとると、税所さんはその日の夜行バスに乗り込みました。そして、わずか1カ月後には、大学の仲間2人とバングラデシュへと飛び立ったのです。

現地では、貧しい女性たちがグラミン銀行から貸し付けを受け、

最初のプロジェクトで農村を訪れた税所さんは、そこで圧倒的な教師不足という現実に出会います。そしてある思いに胸が高鳴りました。「先生が足りないなら、映像授業を取り入れたらどうだろう」。税所さんは高校時代、映像授業を受け、絶対無理といわれた第一志望に現役合格するという体験を持っていました。

Do it! Do it!  
Go Ahead!!  
やっぴみなやんごー!

日本の東大にあたるダッカ大学のような難関大学の合格者のほとんどは予備校に通っています。一流講師の授業を受けるには、村人の年収ほどのお金が必要



予備校のカリスマ教師、英語のザハン先生



難関突破を目指しハムチャー村の校舎で一流講師の授業を受ける

黙って聞いていたユヌス博士は、やがて口を開きました。「おもしろい。やっぴみなやんご。Do it! Do it! Go Ahead!!」  
2010年6月、こうして「e-Education プロジェクト」がスタートしたのです。税所さんたちは、農村出身のダッカ大生マヒンというパートナーを得て、英語、国語、社会の最高レベルの講師を



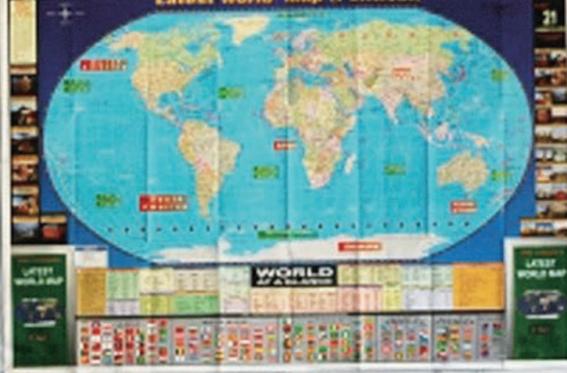
大手予備校の看板が並ぶ首都ダッカの中心地、ファームゲート

です。バングラデシュの農村ではこうした経済的要因などから、優秀な高校生でも進学を諦めざるを得ない現実がありました。

しかし、最高レベルの授業もDVD化すれば農村でも受けられます。「手続きを踏んでいては受験に間に合わない」そう思った税所さんは、映像授業をプロジェクトとして承諾してもらったため、総裁のユヌス博士に直接プレゼンすることになりました。

運命の日、昼食をとるユヌス博士に素早く近づいた税所さんは、ノートパソコンを開き一気にプレゼンを行ったのです。教師が4万人不足していること。自分が日本で映像授業を受け大学に合格したこと。誰もが最高の授業が受けられること。

誰にでも最高の  
授業を受ける  
権利があるんだ



ダッカからバスと船を乗り継いで約8時間かかるマヒンの故郷、ハムチャー村が「奇跡」の舞台となりました

# 対談

シチズン・オブ・ザ・イヤー選考委員長

山根 基世さん

2011 年度受賞者

税所 篤快さん

## これからも行動力と情熱で 新しい時代を切り開いてほしい



MOTOYO YAMANE

山根 基世さん

NHKアナウンサーとして「新日曜美術館」「映像の世紀」「ラジオ深夜便」など数多くの番組を担当。NHK初の女性アナウンサー室長に就任。NHK退職後「ことばの杜」を設立

ATSUYOSHI SAISYO

税所 篤快さん

シチズン・オブ・ザ・イヤー選考委員長の山根基世さんが、2011 年度受賞者の税所篤快さんを迎え、バングラデシュでの教育支援への想いなどを伺いました。税所さんを活動に駆り立てた原動力に、山根委員長も納得され、笑みがこぼれました。

ひとりの人間の情熱が世界を変えられることに感動

山根 まずは、シチズン・オブ・ザ・イヤーの受賞をお聞きになったときの感想をお聞かせいただけますか。

税所 ちょうど、就職のことやプロジェクトの今後について迷いがあつた時期だったんですが、だんだん気持ちが晴れてきて、やるだけやってみようと前向きになった時、受賞のメールが来たんです。ホームページでこれまでの受賞者を見て光栄だと思いましたね。

山根 受賞された活動のきっかけは「グラミン銀行」との出会いですね。

税所 そうですね。とても運命的でした。

山根 ちょうど失恋の後とかか。税所 大学1年のころ、地元の足立区で教育プロジェクトをやるうと思っていたんですよ。塾に行けない貧しい子どもたちのための学習塾のようなものを。それをいろんなところで言っていたのですが、結局やら



IT・パソコンを駆使し、常に世界の仲間とコミュニケーションを取り教育改革に挑戦しています

## 学びたいという 熱意を世界で 支援したい

口説き落としました。その後、プロジェクトの手続きの問題などでグラミン銀行から独立した税所さんは、高校時代から折に触れアドバイスを受けていた二人の恩師から資金提供を受ける形で、プロジェクトを加速させました。舞台となったハムチャ

村の古い小屋を教室として借り、パソコンは友人などに寄贈してもらいました。生徒は、呼び掛けに集まった約30名。いずれも貧困層の高校生たちです。パソコンの画面に映るカリスマ講師の授業にどよめく生徒たち。こうして、彼らの映像授業による受験勉強がスタートしたのです。

### 今までの努力を信じ 難関突破に挑む

2010年10月29日、ダッカ大学の入学試験当日を迎えました。「貧しい者は、ダッカ大学には入れない」そんな常識が打ち破られた日でした。高校生たちと共に大学に着いた税所さんは、一人ひとりに声をかけ送り出しました。試験時間は90分。それぞれが力を出し切り試験は終了しました。1週間後の11月4日、税所さんの携帯電話に運命のベルが鳴りました。

「ダッカ大学、一人合格！」  
マヒンからの電話。税所さんは握った拳を突き上げました。バングラデシュで「奇跡」とまでいわれた快挙の瞬間でした。

### 目標は5大陸での プロジェクト達成

税所さんは今、世界を飛び回り「Le Education プロジェクト」を進めています。中東・ヨルダンで訪れたパレスチナ難民キャンプには、経済的理由で教育格差が広がるバンクラ



ルワンダでの化学の映像授業

その後も生徒たちは頑張りで約30名の参加者中、20名近くが大学に合格し、そのうち4名が難関の国立大学に合格しました。



ルワンダのパートナーと授業を収録の様子



ヨルダンでの授業収録の様子



世界地図を前に、現在の活動拠点を語る税所さん

デシユと似た状況がありました。「映像授業へのニーズもすぐ分かったし、生徒たちの学びたいという意欲も非常に強いです」。税所さんは、現地の高校生にリサーチして先生を探し、今年の4月から映像授業がスタートしました。

アフリカ・ルワンダでは、教育省との連携に向け、まず現地の仲間と活動しています。新聞に取り上げられ、仲間たちのモチベーションも上がりました。「山間部の高校で化学の実験を映像で見たところ、みな食い入るように見て、この授業を続けてほしいと懇願されました」。どの国でも有名講師の授業は生徒たちを魅了しますし、人生が決まる受験は彼らにとって真剣勝負なのです。

バングラデシュで一緒に頑張ったマヒンが、今年の9月から日本の大学に留学することになりました。「現地の学生の間でロールモデルとなっています。僕たちのプロジェクトは、現地の人たちがヒーローになることが大事なんです。税所さんはそう言いながら目を輝かせます。目標は、世界5大陸でのプロジェクト達成。税所さんの挑戦はまだまだ続きます。

(写真提供/Takawo)

なかつたんです。彼女にふられるときそのことも言われて。有言不実行ってカッコ悪いんだと知りました。あれほどタサしい自分はいなかったですね。

**山根** そういう有言不実行の自分を変えようとしたわけなんです。そして、『グラミン銀行を知っていますか』という本が人生を変えることになる。

**税所** バングラデシュで、貧しい女性にお金を貸すというプロジェクトなのですが、ユヌス博士がたったひとりで、しかも20〜30ドルで始めたんです。それが国中に広まり、いろんな村で多くの女性が入り、小さいけれどしっかりとビジネスをしている。それを読んで、ひとりの人間がこんなふうの世界を変えられるんだと、すごく感銘を受けました。

**山根** その日のうちに、著者の秋田大学の坪井ひろみ先生に電話をして夜行バスに乗った。**税所** そうなんです(笑)。ユヌス博士を何年も取材している坪井先生なら、博士のことをもっと知ることができると思ったし、つながりもあるだろうな、チャリティーとかボランティアとか、そういう活動に非常に関心を持って実行していますよね。それはどうしてなのでしょう。

**税所** 僕のばあちゃんは中国人なんです。上海で日本人のじいちゃんと結婚して、それからあちゃんが生まれて、そのあと日本に来たんです。小学生のころから、ばあちゃんは、たばこ工場で働き詰めだったこととか、上海でどんなに苦労したかなど、涙ながらに話してくれました。そういう経験があったからかもしれません。昔から、海外の困っている人に対して、自分に何かできないかなって思う思いがありました。

**山根** なるほど。それで、ずっと胸に落ちました。なぜあんなに突っ走って「人のために」と思うのか。そういう原体験があったんですね。

**山根** 税所さんは、何か行き



貨を売るといったささやかなビジネスなのですが、ユヌス博士が女性たちにお金を貸すのは、相手を信頼して尊厳を持たせる意味もあるのだと思います。

**子どものころの原体験が**  
**社会の矛盾に立ち向かう力に**

## 現地で高校生の現状を変えられる可能性を直感したんです

うと思いました。

**山根** その行動力にはやっぱりみんなビックリしますよね。

**税所** それくらいインパクトがあったんです。こんなに感銘を受けた本だったら、著者の先生に絶対会いたいって思いました。

**山根** それで1カ月後にはバングラデシュまで行ってしまおう。グラミン銀行に行つて、貧しい農村で女性たちがどういうふうになっているかを実際に見たわけですね。

**税所** 強烈に覚えているのは、女性たちのまなざしの強さですね。彼女たちがやっているのは、小さいショップを開いて雑

**山根** 大学を休学してバングラデシュに行き、グラミン銀行で日本人初のコーディネーターに採用され、そこで今回受賞した活動のアイデアが湧いてきたんです。

**税所** 農村の学校をたくさん回っているときに、どこでも先生が足りないという話を聞いたんです。ふいに、時間を遡るように記憶がよみがえりました。僕が受けた映像授業を使えば、先生不足は解決できるし、みんなが一流の先生の授業を受けられるんじゃないかと。

**山根** 貧しい農村の高校生を



「e-Education プロジェクト」がスタートし、生徒全員と

**山根** 税所さんは、これまでもカンボジアに井戸を掘るお金を学校で集めて寄付するよ

## 対談 税所 篤快さん 山根 基世さん



## 人の幸せを願い

## 頑張る人を

## 私たちがもしっかり

## 応援したい

詰まると必ず素晴らしい大人や友人に出会っている気がします。一橋大学の米倉先生もあなたのことを評価していますし。

**税所** 僕の前では評価しないんですよ。でも、ほかの誰かが僕のことを聞くと、褒めるらしいんです。高校生の時から、僕は他の生徒とは何か違うみたいだ、というのはなんとなく感じていて、結構しんどい時もあったのですが、米倉先生は君は君のままがいいんだって言ってくれました。

**山根** そういう話を聞くと、やはり私たち大人が若い人をきちんと励ましていかないとい

けないと思います。バングラデシュから九州大学へいらっしゃっている、アシル先生にも褒められたそうなんです。

**税所** ベンガル語も英語も下手だけど、コミュニケーションは達人だって言われました。

**山根** それはすごいことです。あなたが持っている人間力だと思います。いろいろな人からの励ましは自分にとって支えになるでしょう。

**税所** なります。そういう勇氣の出る言葉をもたらしたときはおくんです。それで、日本に帰りたいな、なんて弱気になっ

たとき、こっそり開いて見えています。そういう言葉が、もう300くらいになっています。

**山根** そうして頑張った映像授業で、ダツカ大学に見事合格者を出したんですね。その時はどんな気持ちでした。

**税所** いろいろな方から期待されていたの

で、うれしかったのと同時に、本当にほっとしました。これでも来年も続けられるって思いました。僕が最終的に実現したいのは、どこに生まれた生徒でも最高の先生にアクセスできることなんです。やがては世界中の先生から学ぶ時代になりたい。そのために僕たちは活動を続けています。

**山根** 税所さんのような若い世代の人が、すごい行動力と世の中を変えたいという情熱を持っていることが、私たちにとても大きな希望です。これから頑張ってください。

**税所** ありがとうございます！

(敬称略)

シチズン賞を誇りに

震災を経験し、今回改めて選考の基準を問いました。それは「無名の良き市民に光をあてる」こと、そして「より良い世の中への改革の意思」を持った方を選ぶことではないかと考え、結果として素晴らしい方が受賞されました。受賞された方々も、シチズン社員の皆さんも誇りにしていただきたいと思います。

山根基世

# CITIZEN OF THE YEAR 1990-2011

## 受賞者の皆さん

シチズンホールディングスは、1990年  
 これまで22回にわたり、市民に  
 幸せづくりに貢献した市民を  
 1990~2011年度の受賞者の方々の、  
 にシチズン・オブ・ザ・イヤーを創設し、  
 感動を与え、社会の発展や  
 選び、顕彰してきました。  
 素晴らしい活動の数々をご紹介します。

|            |          |   |
|------------|----------|---|
| 2011<br>年度 | 税所 篤快さん  |  バングラデシュで、映像授業による高校生の教育支援に取り組む       |
|            | 竹内 龍幸さん  |  盲学校の生徒のために始めた書籍の点訳を半世紀以上続ける         |
|            | 笹原 留似子さん |  東日本大震災の被災地で復元納棺のボランティアやご遺族の心のケアを続ける |

|            |         |  |
|------------|---------|--|
| 2010<br>年度 | 吉田 守松さん |  半世紀にわたり横断歩道で、登校する児童の安全を見守り続ける      |
|            | 吉岡 諒人さん |  夏休みの観察・実験を通じ、「アリジゴクは排泄しない」という通説を覆す |
|            | 樋口 強さん  |  がんを乗り越え、自らの落語で同じ病の患者と家族を励まし続け10年   |

|            |          |  |
|------------|----------|--|
| 2009<br>年度 | 吉島 美樹子さん |  ガン治療による脱毛に悩む人に「タオル帽子」の型紙を作成し、送り届けている   |
|            | 多以良 泉己さん |  リハビリで始めたパン作りが「天使のパン」として多くの人に勇気を与えている  |
|            | 茂 幸雄さん   |  福井・東尋坊に自殺を防ぐための相談所を作り、パトロールと再出発支援を行う |

|            |                 |   |
|------------|-----------------|---|
| 2008<br>年度 | 伊藤 和也さん<br>(故人) |  戦禍のアフガニスタンで緑豊かな国にと、農業支援に取り組み、現地住民に親しまれる |
|            | 川崎個人タクシー協同組合    |  知的障がい施設の子どもたちと行く「タクシードライブ遠足」を30年間継続     |
|            | 出水市立荘中学校        |  ツルの羽数を数えて公式記録とする活動を全校一体で続けて半世紀          |

|            |               |  |
|------------|---------------|--|
| 2007<br>年度 | 西谷 勲さん        |  中学の夜間学級に50年間仕送り続け、生徒たちの学ぶ意欲にエールを送る         |
|            | 車内清掃を続ける高校生有志 |  JR香椎線・西戸崎駅で同じ中学出身の高校生が、自発的に下校時に乗車した電車でゴミ拾い |
|            | 谷垣 雄三さん       |  西アフリカで25年以上にわたり、外科医として現地医療に携わる             |

|            |         |  |
|------------|---------|--|
| 2006<br>年度 | 川越 恒豊さん |  刑務所内で放送される人気番組のDJを27年間で300回以上続ける |
|            | 桑山 利子さん |  スリランカの学生支援を続ける一方、自身も念願の高校卒業を果たす  |
|            | 有城 覚さん  |  交番に届けられる動物を引き受け、自力で移動動物園を開園      |

|            |                   |   |
|------------|-------------------|---|
| 2005<br>年度 | 堀田 健一さん           |  障がい者一人ひとりのニーズに合わせた自転車、手作りで26年間作り続ける |
|            | 吉野 健治郎・勝 親子       |  親子3代、45年以上、地域のお年寄りへ眼鏡の贈り物を毎年続ける     |
|            | 日本スピンドル製造株式会社社員一同 |  JR福知山線での脱線事故現場で社員一体となり救援活動を実施       |

|            |                      |   |
|------------|----------------------|---|
| 2004<br>年度 | 新宮山彦ぐるーぷ             |  20年にわたって大峯奥駈道(熊野古道)の南半分約45キロの整備を続ける |
|            | 兵庫県市町村職員年金者連盟豊岡支部 有志 |  水没していく観光バスの上で励まし合いながら全員が無事生還       |
|            | 永井 利夫・サヨコ ご夫妻        |  子育てに関する問題が掲げられる現代で、60人の里子を育てた     |

|            |              |  |
|------------|--------------|--|
| 2003<br>年度 | 高松 由美子さん     |  長男を失った深い絶望を胸に、同じ試練と戦う犯罪被害者遺族らを支援 |
|            | 遠藤 マルシアアケミさん |  お弁当の配達で緑で、資金難で閉校したブラジル人学校を再開校    |
|            | 曾我 健太さん      |  ひざ下から義足ながら、夏の甲子園で奮闘              |

|            |                 |   |
|------------|-----------------|---|
| 2002<br>年度 | 谷村 基さん          |  励ましの手書きはがきを35年にわたって独居老人に送り続ける |
|            | 武井 弥生さん         |  東ティモールなど海外での医療支援を医師として継続      |
|            | アフガニスタン義肢装具支援の会 |  アフガニスタンの人々のために義肢を制作・進呈        |

|            |         |  |
|------------|---------|--|
| 2001<br>年度 | 伊藤 明彦さん |  全国各地を訪れ、広島・長崎の被爆者1,003人の生の声を収録   |
|            | 大島 誠人さん |  自宅の望遠鏡で変光星「WZ」の増光現象を世界で最初に発見     |
|            | 菅谷 昭さん  |  チェルノブイリ原発事故の被ばく者の治療に、甲状腺外科医として従事 |

|            |              |   |
|------------|--------------|---|
| 2000<br>年度 | 近藤 原理・美佐子ご夫妻 |  障がい者のために、38年にわたり自宅を開放して共生を続けてきた   |
|            | ジュンコアソシエーション |  ベトナムの子どもたちの教育をサポートする活動を、3段階にわたり継続 |
|            | 福祉工房あいち      |  障がい者一人ひとりの障がい度に合わせて、補助器具を考案し、製作   |

|            |                        |  |
|------------|------------------------|--|
| 1999<br>年度 | セイヤー・ミドリさん<br>与那嶺 政江さん |  在日米軍の父と地元女性の間にも生まれた子どものために、学校を開校 |
|            | トーマス・カンサさん             |  修理、再生させて母国南アフリカに寄贈した車イス、2000台   |
|            | 録音グループ「声」の皆さん          |  視覚障がい者のため、新聞や新刊書の録音テープを届けて25年  |

|            |                    |  |
|------------|--------------------|--|
| 1998<br>年度 | 岸本 康弘さん            |  ネパールに自費で学舎を建設、無償で子どもたちの識字教育に打ち込む |
|            | 金子 聡美さん<br>安田 志津さん |  ドナーカードへの関心と理解を目指し、自転車で日本列島を縦断    |
|            | 「福祉ネットワーク池袋本町」の皆さん |  電気ポットのセンサーを使い、一人暮らしのお年寄りを地域で見守る  |

|            |                  |  |
|------------|------------------|--|
| 1997<br>年度 | 葛木 みどりさん         |  南米パラグアイで、子どもたちの栄養改善に向けた学校給食を実現 |
|            | 高澤 圭介・ナミ子ご夫妻     |  私財を投じてお年寄りや障がい者が気軽に立ち寄れる家を完成   |
|            | 愛知県立東山工業高等学校車いす部 |  高校生が車いすの電動化ユニットを開発。12台を利用者に寄贈  |

|            |         |   |
|------------|---------|---|
| 1996<br>年度 | 小山 道夫さん |  ベトナムの子どもたちのため職を辞して現地へ赴き「子どもの家」を建設 |
|            | 福岡 明夫さん |  自らの体験から点字ブロックの改善に取り組み、実用新案にも登録    |
|            | 古川 ヨシさん |  障がい者施設で入所者の健康と暮らしを支える、車イスの看護師     |

|            |                |  |
|------------|----------------|--|
| 1995<br>年度 | 川田 龍平さん        |  命がけで薬害エイズに立ち向かい、実態の認知と責任追及に献身  |
|            | 木村 三男さん        |  濁流にのまれた母子3人を発見し、飛び込んで全員を救出     |
|            | 神戸商船大学「白鷗寮」自治会 |  阪神淡路大震災発生から20分後、寮生250人が人命救助に出勤 |

|            |              |  |
|------------|--------------|--|
| 1994<br>年度 | 星野 勇・シズエ ご夫妻 |  足の不自由な方のために1000足を超える靴を無償で修理・改良   |
|            | 山下 秀治さん      |  知的障がい者施設で散髪奉仕を続け、先生と呼ばれる信頼関係を構築  |
|            | 森本 春子さん      |  山谷の労働者たちの相談相手になり、食べ物や衣類などの支援を続ける |

|            |                    |  |
|------------|--------------------|--|
| 1993<br>年度 | 宇佐美 松恵さん           |  1万枚を超える座布団を手作りし、日本はもちろん、アフリカまで送る |
|            | 佐藤 昭夫さん            |  パーキンソン病の患者さんたちの送迎、乗降を手助けして12年   |
|            | 8/6 竜ヶ水駅災害救助活動グループ |  土石流にのみ込まれた列車乗客を、冷静な判断で献身的に救助   |

|            |             |  |
|------------|-------------|--|
| 1992<br>年度 | 清水 ルイズさん    |  日本で出産を迎える在日外国人に寄り添い、病院紹介や通訳などの世話を続けている |
|            | 干川 文次さん     |  絶滅寸前だった高山植物・駒草の保護に尽くし、見事、山一面に復元        |
|            | 「雄冬新聞」歴代編集長 |  地域情報のミニ新聞を、歴代校長が引き継いで手作りリレー            |

|            |              |  |
|------------|--------------|--|
| 1991<br>年度 | チョン・キューキョンさん |  長年の診療所勤務から韓国に帰国するも、住民の切望に応え再び医療の場へ |
|            | 馬場 国敏さん      |  湾岸戦争で原油汚染にあえぐ野鳥を救うため、国を動かし現地で活動    |
|            | 十円会          |  月会費10円というユニークな福祉の会を続け、地域活動に大きく貢献   |

|            |         |   |
|------------|---------|---|
| 1990<br>年度 | 加藤 幸男さん |  バスの運転中に負傷者を発見。適切な判断と乗客の協力で迅速に救助     |
|            | 鈴木 陽子さん |  過疎地の医療に貢献したいと42歳で医師免許を取得。単身北海道で医療活動 |
|            | 林 鎌友さん  |  使用者の立場に立った点字カレンダーを作成し、13年間全国に送付     |



## シチズンホールディングス株式会社

〒188-8511 東京都西東京市田無町 6-1-12  
TEL.042-466-1231 FAX.042-466-1280

<http://www.citizen.co.jp/coy/index.html>

CITIZENはシチズンホールディングス株式会社の登録商標です。

2012年6月発行